中国史上の女性群像

2012 年度アジア史専攻 2 年生

研究報告集（氣賀澤史料演習ゼミ）

目次

序言	氣賀澤 保規	1
『三国志演義』の女性像	椎名　宏太	3
中国書道史における女性の書	田村　竜一	8
中国星座における女性	三橋　雄太	14
中国の宗教と女性について	諸田　雄斗	21
唐代における妓女たちの活躍	吉岡 真奈美	26
女性神仙から道教を探る	山本　夕貴	30
西太后は悪女であったか	櫻井　悠冶	36
歴史に見る中国女性の「強い」女たち	胡　盈奕	41
ラオスにおける女性	持田　智洋	45

2013 年 3 月

明治大学文学部アジア史専攻氣賀澤研究室（発行）

序　言

アジア史専攻教員　氣賀澤保規

本年度（2012 年度）のアジア史専攻 2 年生を対象とする史料演習（氣賀澤ゼミ）では、「中国史上の女性群像」をテーマに、様々なことに取り組みました。

まず中国・東アジア史を学ぶ上での基礎となる史料学を押さえました。「六経皆史」となる六経から正史、四部分類と史の成立、史館と史書の編纂体制、新出資料の全史など、歴史学徒としての大枠はほぼ伝えたつもりです。

それをふまえ、多くの女たちの史料を原文で取り上げました。ざっと振り返ってみると、劉向撰『列女伝』や『史記』殷本紀、『漢書』班昭（曹大姑）伝の「女誡」、顧愷之筆「女史箴図」のもととなった「女史箴」（『文選』）、顔之推の『顔氏家訓』の「治家篇」、さらには『隋書』独孤皇后伝を読み切り、最後に『旧唐書』の長孫皇后（太宗皇后）伝に入るところで時間が来てしまいました。女性を基軸に中国史の古代中世を追いかけることは、私にとってなかなか面白いことでしたが、学生諸君はいろいろ面食らうこと多かったと思います。しかし誰も音を上げず、皆着実に力をつけてきたことが実感できます。

授業ではまた、前期には張芸謀監督の「初恋のきた道」（我的父親母親、1999 年）、後期には同じく張芸謀の「秋菊の物語」（秋菊打官司、1992 年）の 2 本の映画を取り上げました。中国の現代に入る手前で生きた農村女性を、その風景や環境また人々の息づかいのなかで、原語の中国語を入れて理解しようというものでした。それぞれ考えるところが多かったと思います。

またこの他に、教室からフィールドに飛び出してみようということで、東アジアの古代中世を訪ねる「関西フィールドワーク」を、奈良・飛鳥の地で実施しました。これは全員が行くことができませんでしたが、参加者には歴史の現地を見ること重みと楽しさを肌で知ってもらえたのではないでしょうか。

さてその上で、授業で一貫して求めたのは文章を書くこと、その力を養うことの重要さであり、できれば最後に 1 冊の文集を作成しようと提案しました。そこで、夏休み前にそれぞれ関心ある女性史に関わるテーマを設定し、秋にかけて小論文を提出、その後何度か遣り取りをし、最後に本人たちが完成稿として出してきたものがこの論文集、「中国・東アジア史上の女性群像」となります。

私は各人が文をまとめるに先立って、「剽窃」が犯罪行為であることと自分の論を立てることの大切さを強く伝えました。おそらく皆そのことを頭に入れながら、独自の中身と考察のために苦労し、レポートとは違う論文を書くことの大変さの一端を理解したものと思われます。文章表現や論の展開にまだ不慣れなところは認められますが、20 歳前後の若者が最初に書いた論文、そして 1 年間の成果として受け止めていただければ幸いです。　　(2013 年 1 月 17 日)

付記

私たちは 2012 年の秋も深まった **11 月 23 日（金）－25 日（日）、「明治大学アジア史専攻関西フィールドワーク　日本における中国・東アジアの古代中世を訪ねて」**を実施しました。奈良市一帯では平城宮跡、東大寺、春日大社、唐招提寺や薬師寺、さらに明日香・橿原方面では飛鳥寺、石舞台、高松塚古墳、天武持統陵、藤原京跡、また国立奈良博物館や橿原考古学研究所附属博物館などと、教室を飛び出し、古都の奈良平城京や飛鳥・藤原京の地を巡りながら、日本における中国・東アジアの古代中世を体ごと味わい、東アジアに連なる歴史の広がりを考えました。それぞれ歴史の現場に立つことの意味、歴史を学ぶことの楽しさを心に刻みました。

見学先では臨地講義（説明）も交え、夜は歴史をめぐる様々な話題を語り合い、学年を越えた和気藹々のゼミ旅行となりました。そのなかで、２年生から寄せられた感想文もありましたので、各論文の最後に掲載いたしました。あわせて読んでいただけることを願っています。

東大寺大仏殿前にて